

## アイヌ民俗図資料の見方

児島 恭子 (早稲田大学 非常勤講師) KOJIMA Kyoko

アイヌのように19世紀以前には自らの文字資料をつくらなかった人々の民俗を知るために、非文字資料はどういう意味を持つのか。文字資料がないならばとて、アイヌは絵画も描かず、アイヌに関する非文字資料は他者によるもので、アイヌ自身の与り知らぬものである。民具の実物はアイヌ自製の非文字資料であるが、狭義には、実物よりもそれらを描いた図像を非文字資料として扱おうとされているようである。個々の民具はそれ自体で完結したものであるように思われるが、使われている情景や使う人間が描かれた絵や写真などの広義の非文字資料には、民俗資料としての情報があるからであろう。それがたとえ写実ではない図像であっても、重層的に意義は見出せる。しかしその考察や研究は、対象となる人々や文化について共通の理解をもっている、もしくは持ちうる人々の間で成立する議論なのではないか。

冒頭の設問を、「非文字資料を文字資料による歴史研究を補完する資料として役立てるには」と表現したら、その営為は文字資料を主として非文字資料を従とするにすぎず、それをめざしているのではなく非文字資料自体が課題なのだといわれるであろう。「非文字資料の体系化」という表現からうけるイメージは、非文字資料のみを扱うというテーマである。しかし、本誌において中村政則氏は文字資料と非文字資料の関係について4つの場合があると発言され、両者を相互補完的なものとしてとらえることによって両者がより意義を深めるとされている(『非文字資料研究』No.5、2004年9月)

じっさい、そういう絵の研究は、その絵を理解するために文字資料すなわち文献を渉猟し、民俗資料の実物を参考にして、何が描かれているのかという事実や、描く心性について検討される。絵引の作成を試みるに際して、描かれたモノの図像上の変遷や場景の分析が行われる。アイヌの人々や民俗を描いた絵についても同様である。そこから導かれるものは何なのだろうか。

2006年12月の研究会において、菅江真澄がアイヌの民俗を書き、描いた絵に「セッカ」とされた棧敷状の台があり、それを「榻」(読みはトウ)と表現している例についてとりあげた。この絵は、「広き榻(セッカ)の上に、

やゝみそぢ近からんとしの婦女(メノコ)ひとり(後略)」という文章の挿絵である。この絵引をつくるとしたら、女性が座っている床の名称をセッカというアイヌ語名称にするのかそれならどう表記するのか、榻とするのか、形状や用途を説明する一般的な語句にするのか、という問題があるが、それは世界中の図像資料に共通するので措く。問題はこの資料にしたがえばアイヌ語名称はセッカになる、ということである。しかし、それは事実としては誤りで、セッカはセツ・カ<セツ・の上>であり、セツだけが高床で、家の壁際にしつらえてあるベンチ状の寝台をさすことが多い。子熊を飼う檻や鳥の巣もセツといわれる。つまり、菅江真澄は女性が座っている高床をセツではなくセッカとしてしまったのだが、それはとりもなおさずアイヌの話した言葉を聞いたのであろうということの意味する。日本語ではじっさいにそれを見ている状態での会話では「あの女が座っているのは高床の上だ」とことさら「上に」とは言わないだろうが、アイヌ語ではそういう位置を表す言葉が必要なので語られたため、「上」まで高床の名称に入れてしまった。そこに異言語ゆえの誤解が生じている。このようなことに触れたが、それはたいした問題ではない。

絵引作成の対象となる非文字資料が他者によるものであるかぎり、その理解に資する文字資料、非文字資料が誰の手によったかにかかわらず、研究の営為や過程、結果するものは他者のものであることの認識を問題にしたいと思う。誤解のないように付け加えておくが、たとえばアイヌが絵引作成の研究に参加すればアイヌ民俗の研究になるというのではない。非文字資料をそれとして尊重することはどういうことかという点である。

